

大木町文化財調査報告書

# 大木の川まつり



2019

大木町教育委員会

## 序

大木町には、1000年以上も前から先人達から引き継がれてきた半人工の水路である堀が、町内に張り巡らされています。その総延長は約214.7km、総面積は約254.4haあり、町の面積に占める堀の割合は約14%にものぼり、筑後川下流域の堀が多い地域の中でも密度が高い地域です。

この地域では、堀が昔から人々の営みに深く関わり、生活用水として、また、農業用水として、命を繋ぐ貴重な水の供給源として大切にされていました。人々は大切な堀を、祭事や共同作業を通して維持管理をおこない、また、洪水や旱魃などの自然災害に対しても、知恵を出し合いながら向き合ってきました。そうした人々の堀との関わりが、本町における四季折々の「暮らしの景色」を創り出してきたと言えます。

その中でも、堀に新しい水が流れ込む4月下旬ごろから、水神様に水への感謝、五穀豊穣と水難除けの祈りを込めて家庭や地域でおこなわれる川まつりは、本町の風物詩として受け継がれてきました。

しかし、現代社会における生活様式の変化とともに、次第に堀と人々の関係が疎遠化しました。川まつりの実施件数も減少し、実施主体や形態の変化が生じてきたことを受け、平成28年3月、「大木の川まつり」が福岡県の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択を受けました。本町教育委員会では、その貴重な習俗の記録保存と承継を目的として、平成29・30年に町内各地域で実施される川まつりの詳細調査をおこない、報告書を作成しました。

本書を文化財の記録保存のみならず、郷土の民俗伝承および民俗学研究、文化財保護等の学術研究、あるいは学校教育、社会教育、地域活動の参考資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査報告書の刊行にあたり、執筆いただいた吉留徹氏並びに福岡県教育庁文化財保護課からは、貴重な指導・助言を賜り、併せて調査に協力いただいた地元の関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

大木町教育委員会  
教育長 平山浩一

## 例 言

- 1 本書は、福岡県文化財保護事業補助金を受け、平成29～30年度に実施した大木の川まつりの調査報告書である。
- 2 本調査では、山口県下関市立豊北歴史民俗資料館館長吉留徹氏の指導を受け、大木町教育委員会が実施した。
- 3 本文中で使用される民俗語彙とされるものは、漢字表記可能なものは漢字表記とし、それ以外のものはカタカナ表記とした。
- 4 本書掲載の写真は、地域調査に当って撮影した記録写真と、地元住民による提供である。
- 5 本書掲載の地形図は、地理調査所が昭和22年に発行した1/25,000『羽犬塚』を用いている。
- 6 本書の執筆は第4章を吉留氏が担当し、他は事務局で行った。
- 7 本書の編集は山下歩が担当した。

## 目 次

第1章 はじめに ..... 1

### 第2章 大木町の環境

(1) 地理的環境 ..... 2  
(2) 歴史的環境 ..... 2

### 第3章 川まつりの調査

(1) 調査に至る経緯 ..... 4  
(2) 調査の概要 ..... 4  
(3) 起源・目的 ..... 4  
(4) 各地区の状況 ..... 7  
(5) 特徴のある川まつり ..... 13  
(6) カザリの作成工程 ..... 23

### 第4章 川まつりの特徴と分布

(1) 大木町における川まつりの特徴 ..... 29  
(2) 周辺地域の特徴と分布 ..... 36

第5章 おわりに ..... 44

## 第1章 はじめに

大木町の人々の生活と堀とは、密接な繋がりがあった。この地域の人々は、その地理的状況によって、當時水を得られる環境になかったため、堀に貯めた水で稻作をおこなってきた歴史があり、その方法は今も続いている。稻作期間には堀に水を蓄えて利用し、水嵩の減った冬場には、護岸の修復や堀底に溜まった泥土を田んぼにかき揚げる「堀干し」の風景が見られた。4月下旬、稻作の時期になると川から堀に新しい水が引き込まれる。この時期に、川まつりが伝統行事として受け継がれ、現在もおこなわれている。

この川まつりとは、十字に組んだ竹を堀に立て、カザリを吊るし、水難防止等を祈願する行事である。大木町内には地域毎に特色ある川まつりがおこなわれる一方、社会の変化等により伝承が困難になっている地域もみられる。そこで現状の記録をおこない、地域的特色を把握する等により文化財としての位置付けをおこなうため、平成28年に福岡県の「記録措置等を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。それを受け、大木町教育委員会において、平成29年度から2ヶ年をかけ調査を実施した。

調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 大木町教育委員会

教育長 平山 浩一

生涯学習課長 本村 伸治(平成29年度)

野田 昌志(平成30年度)

文化・町民支援係長

石橋 浩二

文化・町民活動支援係学芸員

山下 歩

調査指導

山口県下関市立豊北歴史民俗資料館館長 吉留 徹



上八院地区の川まつり

調査助言 福岡県

人づくり・県民生活部文化振興課世界遺産室 久野 隆志

教育庁総務部文化財保護課 野木 雄大(平成29年度)

教育庁教育総務部文化財保護課 岸本 圭(平成30年度)

調査にあたり、町文化財専門委員をはじめ大木町各地域の皆様、また、情報収集にあたり、福岡県内の各市町村の文化財担当者には、大変お世話になったことに感謝申し上げたい。

## 第2章 大木町の環境

### (1) 地理的環境

福岡県三潴郡大木町は、県の南西部、筑後平野のほぼ中央に位置し、東に筑後市、西に大川市、南に柳川市、北に久留米市と接している。町の総面積は18.44 km<sup>2</sup>で、九州一の大河である筑後川の沖積によって形成され、矢部川水系で町北部の町境を西流する山ノ井川、中南部を花宗川が筑後川に流れ込む標高4~5メートルの平坦な地形であり、町の総面積の約14%を占める堀が町全域に張り巡らされ、豊かな田園空間を形成している。



第1図 大木町の位置

### (2) 歴史的環境

大木町一帯は、西暦700年代の条里制の時代頃から、人々が堀を掘削し農耕生活を営みだし、西暦900年代の荘園時代には、堀が縦横無尽に張り巡らされた筑後川下流域特有のクリーク地帯が形成された。さらに西暦1600年代の江戸時代には、半人工河川である山ノ井川、花宗川と、無尽蔵に掘られた堀とが連結、系統化した水路網として整備され、稲作地帯として発展していった。

しかし、この地域は、干満の差が激しい有明海にほど近いことから、農業用水としてだけではなく、飲用、生活用水としても利用する堀の水の確保に、人々は大変苦労してきた。豊かに思える水も、大変貴重で、大切な水であった。

明治維新以降、近代化が進んだが、昭和初期までは、堀の水も飲料水として利用されており、当時の家は、必ず堀の近くに建てられ、堀岸に「汲ん場」又は「イガワ」と呼ばれた場所を設け、そこで飲料水を汲み、洗い物をし、食べるための魚を釣ったり、子ども達は泳いで遊んだりと、人々の生活と堀とが密接に関係していた。

さらに近代化が進むと、食料も豊かになり、昭和52年度には上水道も整備されるなど、人々の生活と密接な関係であった堀も、生活排水を垂れ流す場所となり、次第にその関係性は薄れていった。さらに、高度経済成長期には、化学薬品や農薬などの排水によって堀は汚染され、悪臭を放ち、貝や魚も住めなくなるなど人々に嫌われる場所となってしまった時期もあった。現在は合併浄化槽の普及も進み、その環境は改善へと向かっている。

近代化は、堀と人々の関係性だけではなく、堀の形も変貌させた。昭和43年から平成14年にかけて実施された農地整備事業により、生産性の高い農地への再整備と併せて、無尽蔵に張り巡らされていた堀は大きく直線的な幹線水路へと姿を変え、農業用水として利用されている。

時代の変遷とともに、人々との関係が次第に薄れ、農業用水、生活排水としての機能を果たすだけとなっていた堀も、近年はその価値が見直され、豪雨時の貯水施設としての減災機能に加えて、堀と農地が織り成す田園風景としての景観的価値も評価されてきている。また、まだ堀と密接な関係であった時代の行事や祭りを通じて、希薄化しつつある地域コミュニティの再構築に取組むなど、堀を通じたまちづくりが展開されている。

註および引用、参考文献

『大木町堀なおし計画』2016、大木町誌編さん委員会『大木町誌』1993



第2図 昭和20年代の大木町の地形 (1/25,000)

## 第3章 川まつりの調査

### (1) 調査に至る経緯

川まつり調査のきっかけは、国立歴史民俗博物館共同研究員の石垣悟氏(文化庁文化財部伝統文化課(現文化財第一課)民俗文化財部門調査官)が大木町の生業の変化について調査したことに始まる。高度経済成長の中で大木町の人々がどのように堀と接しながら、生業が変化していったのか検討が加えられたが、その中で特徴的な祭りである「川まつり」が着目されることとなった。

福岡県では「大木の川まつり」を文化財として把握しようと、平成26年度に福岡県文化財保護審議会へ諮り、平成27年度には同審議会無形文化財および民俗文化財専門部会の段上達雄専門委員(別府大学文学部教授)と吉留徹専門委員、当時福岡県文化財保護課職員であった久野隆志氏(現福岡県文化振興課世界遺産室)、本町職員2名、合計5名で現地調査がおこなわれた。調査の結果を受けた審議が重ねられ、平成28年3月25日付で「大木の川まつり」を福岡県の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択された。

これを受け本町教育委員会では、県の補助金を受け、平成29・30年度の二ヵ年で「大木の川まつり」の詳細調査をおこない、報告書を作成することとした。

なお、調査のきっかけとなった石垣悟氏の研究結果は、「筑後平野の生業と高度経済成長」(国立歴史民俗博物館研究報告第207集)として平成30年に刊行されている。

### (2) 調査の概要

川まつりの目的は町内各地域でほぼ相違なく、前述のとおり五穀豊穫と水難防止とされ、笹竹に稻藁で加工した「ワラツト(藁苞)」や「ヒヨウタン(瓢箪)」、竹を加工した「竹筒」を飾ることが主流であるが、各地域で飾りや行事の進め方など様々な違いが見受けられたため、町内で実施されている川まつりの観察調査を、公民館集落単位で実施している20地区、49か所(蛭池、侍島、絵下古賀、吉祥の4地区は、地区内の組単位で実施するなど複数を作成)に加え、個人で実施している2か所について、調査をおこなった。その一覧は第3図および第1表の通りである。

### (3) 起源・目的

聞き取り調査においては起源や目的の確認を実施した。その結果、起源については、はつきりとしたことは不明であるが、地区の90歳代の住民によると、その方の父親が子どもの頃から川まつりがおこなわれていたという話を聞いていたそうで、少なくとも明治後期には既におこなわれていたようである。

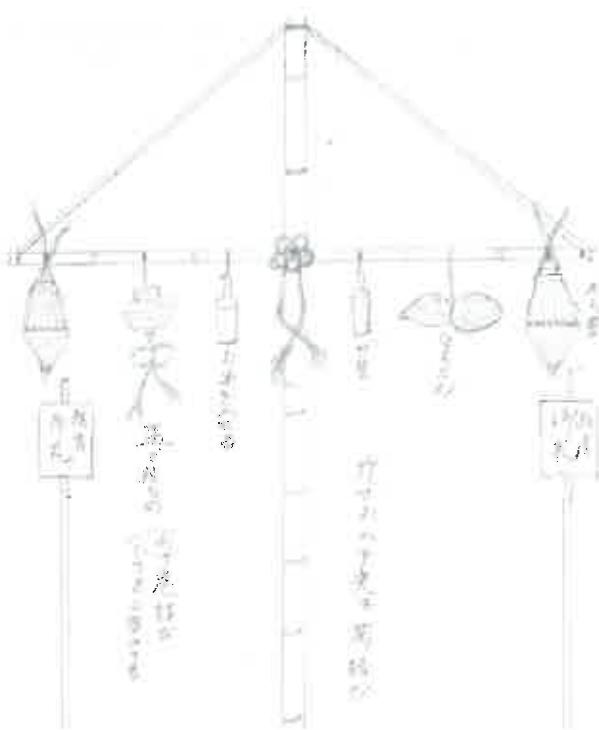
川まつりの目的については、五穀豊穫と水難防止を祈願した祭事とされている。農業用水として大変重要であった堀。また、堀岸に設けられた「馬洗い場」近くは学校にプールのない時代の子ども達の格好の遊び場であり、魚採りや泳ぎの練習の場所でもあったために、時には溺れて命を落とす子どももいたという。こうしたことから、集落への水の引き込み口である集落境や馬洗い場付近に川まつりの飾りが設置されていたようである。

「筑後平野の生業と高度経済成長」(2018)によると、以前はムラウチやクミウチと呼ばれる地域の集まりでおこなう川まつりと、各家でおこなう川まつりとで少々違いが見られたようである。だが、昭和40年代以降、だんだんと衰退していき、現在のようにほとんどが地域の行事になっている。

聞き取り調査の象徴的なものとして、町文化財専門委員会委員長である鳥取英記氏の談は下記の通りである。

日本では昔から、山も木も石も動植物も、自然のもの全てに神様が宿ると信じ、自然を大切に、自然と共に生活していた。その中でも「水」は、水の確保に大変苦労したこの土地の人々にとって、大変重要なものであった。昔はその水をめぐって“水争い”が起こったほどで、堀の分岐点には神社(氏神)が建てられ、そこで話し合い、争い事を収めていた。そのように大切な水は人々の暮らしにとても密着しており、家々の周りには、イガワ(洗い場、水汲み場)が設けられ、モエイガワ(協同井川)などの協同で使う井戸もあり、イドサラエの時には井戸端で水神さん祭りが必ずおこなわれていた。先人たちの水を大切にする心、自然への敬意などが、“川まつり”という形で受け継がれ、現在まで残っているのではないだろうか。

町の風物詩ともいえる川まつり。現在は行政区、組単位でおこなわれており、飾り物の形も少しずつ違い供物の中身も地域による特性が見受けられる。近年、農地整備事業により、無尽蔵に張り巡らされた堀は大きく直線的な幹線水路へと姿を変えてしまった。しかし、集落内では、昔ながらの堀が残り、景観も保たれている場所もある。“川まつり”として伝えられてきた、先人たちの自然や水への感謝、崇拜の心をこの町で暮らす私たちの財産としてこれからも残していきたい。



鳥取氏スケッチ 上八院の川まつり

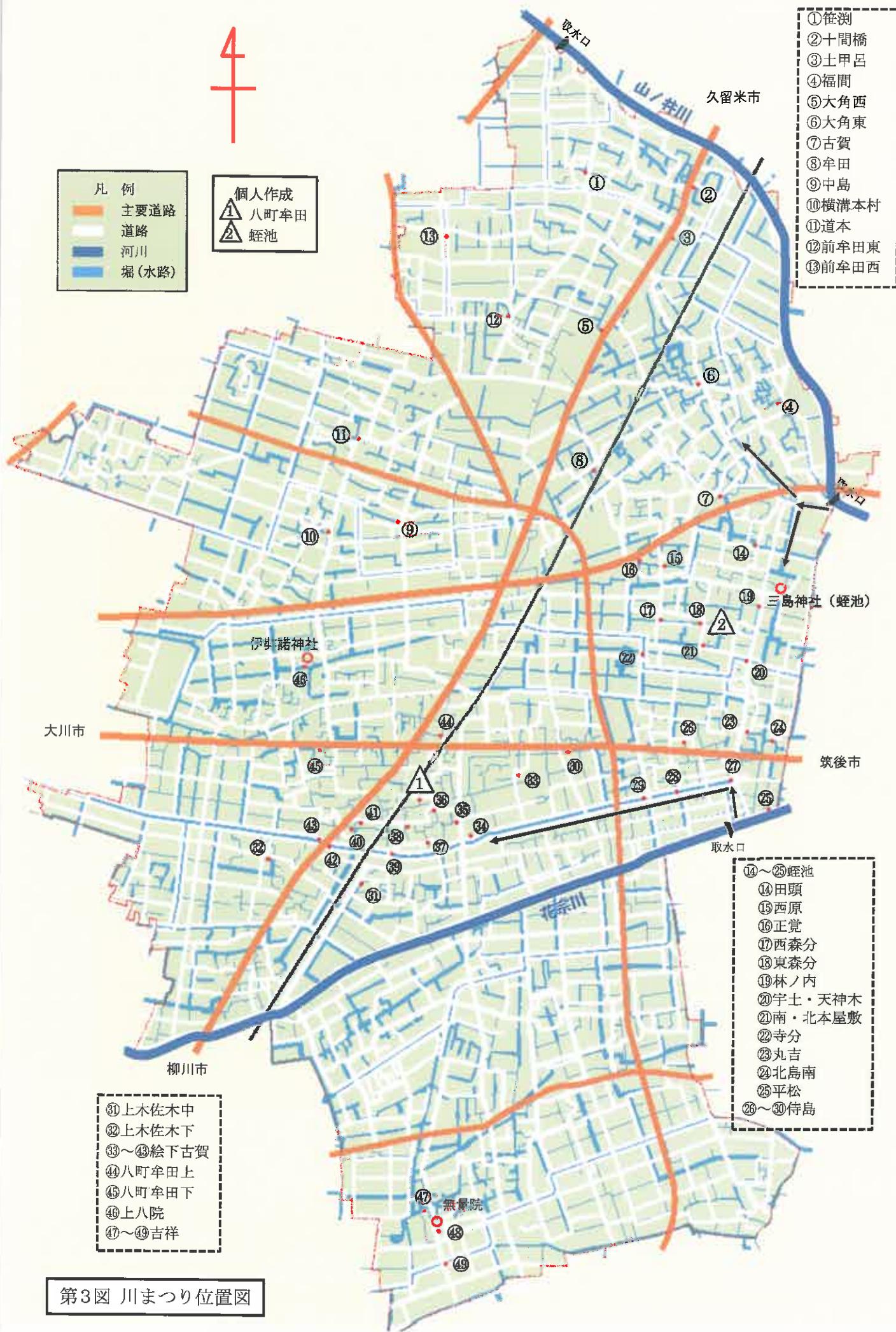


イラスト1  
馬洗い場に設置した川まつりの飾り



イラスト2  
集落境の堀に川まつりを設置している様子  
イラスト『みんなが暮らしの天才だった。』1998

4



#### (4) 各地区的状況

##### まつり当日の製作・設置工程と廃棄

川まつりは、ほとんどの地区で午前中に実施される。堀に立てたカザリは1年間立てたままにしておき、翌年の川まつりの際に古くなったものを撤去する形をとっている地区が大半である。撤去したものは翌年1月の左義長の時に焼却するなどして廃棄。中には自然に朽ちるまでそのままにしている地区もある。カザリを立てた後、以前は各地区、直会までおこなっていたが今では簡略化し、公民館で軽食をとる形に移り変わっているが、侍島地区は作成から食事にいたるまでを当番の家でおこない、以前の様相を継承している。

以下、各地区および個人作成について、個別に記述する。また、土甲呂地区、吉賀地区、蛭池(林ノ内)地区、上八院地区および吉祥地区については詳細調査を実施した。なお、地区名の後に付した地図番号は、一覧表(第1表)および位置図(第3図)に一致し、各地区の世帯数・人口は平成29年4月現在のデータである。

##### 笹渕地区【地図番号①】

世帯数 323、人口 934人、22組

氏神：高良玉垂命神社

祭日：4月下旬～5月上旬の日曜日

場所：個人宅

カザリ：ワラツト1

宗教者の関与：薬師如来を祀っている自宅の世話人が

組内で願立ての意味合いでおこなっている

供物：ご飯(適量)、塩(小皿一杯程度)、イリコ、酒

実施内容：笹渕では地区でおこなう川まつりではなく、1か所の組内が作成。以前は子どもも参加し水芋を食べた。大人は鶏をさばいて皆で食していた。川まつりをおこなう第一の理由は子どもが堀で溺れないよう、水難防止と農業の五穀豊穣が言い伝えられている。



##### 十間橋地区【地図番号②】

世帯数 39、人口 103人、4組

氏神：天満神社

祭日：5月初旬の日曜日

場所：十間橋公民館で作成し、七つ町橋の堀に設置

カザリ：ワラツト2、ヒヨウタン1、三連サカズキ1、竹筒1

宗教者の関与：蛭池の三島神社宮司が設置場所でお祓い

(カザリ作成日とは別日)

供物：鯛・オニギリ・塩・酒・果物

実施団体：地区で4組に分かれ、当番の組が主となり作成している。平成30年度は午前8時から3組(全体で4組)が担当で、次年度担当の者と区長、公民館長、作成担当者が参加。大角東区から作成方法等を教わり、平成28年度から川まつりが復活した。飾りを作成していない時期も神社での祈祷をおこない、御札のみ設置していた。



### 福間地区【地図番号④】

世帯数 102、人口 305 人、8 組

氏神：大雷神社

祭日：4月第3週目の日曜日

場所：福間公民館で作成し、地区境の堀に計 5 本設置

カザリ：ワラツト 1

宗教者の関与：大雷神社で玉串拝礼の儀をおこなった後、カザリを設置

供物：鯛はそのまま竹串に刺してワラツトへ付け、イリコ、塩（ひとつまみ程度）、昆布をラップに包みワラツトの中へ入れる。

実施団体：区長、公民館長、老人クラブ代表、座元、宮総代の計男性 5 人で実施。46 軒の座元で 1 年に 1 回ずつ回している。昔は座元が準備から食事までのすべてを担って世話をしていたが、現在はお昼に弁当を食べるのみとなっている。



### 大角西地区【地図番号⑤】

世帯数 243、人口 713 人、21 組

氏神：田中神社、三島神社

祭日：4月 29 日

場所：田中神社の氏子宅で作成し、県道久留米柳川線西側の流れ堀に設置

カザリ：ワラツト 2、ヒヨウタン 1、サカズキ 2、竹筒 1

供物：円錐状に握ったオニギリ（ゴクサン）、イリコ、塩、酒

実施団体：大角西地区は田中神社の氏子である 3 つの組内が共同で実施。毎年、集まる人数は異なるが、10 名程度の参加。男性はカザリの製作、女性は供物の準備や設置した後に食べる弁当の手配などをおこなう。平成 29 年は、男性 9 名、女性 3 名程度の参加。



### 大角東地区【地図番号⑥】

世帯数 209、人口 588 人、11 組

氏神：三島神社

祭日：5月第3日曜日

場所：大角東コミュニティセンターで作成し、大黒橋北側の堀に設置

カザリ：ワラツト 1、ヒヨウタン 1、三連サカズキ、竹筒 2

宗教者の関与：三島神社の宮司 1 名が設置場所でお祓い

供物：鯛、オニギリ（ゴクサン）4 個、イリコ、塩（小皿一杯程度）、酒

実施団体：地区役員（区長・公民館長・老人会・育成会・子ども会など）で参加できる者が集まり、作成は主に大人が担当。子どもたちに縄なえや飾りの作成手順等を教え、担い手の育成も兼ねて育成会や子ども会からの参加を促している。消滅していたが平成 27 年に実行委員会を立ち上げ、復活をした。



### 牟田地区【地図番号⑧】

世帯数 275、人口 779 人、16 組

氏神：三島神社

祭日：毎年 4 月第 2 または第 3 曜日

場所：牟田公民館で作成し、公民館北側の堀に設置

カザリ：ワラツト 2 種類を 2 つずつ 計 4 個、

ヒヨウタン 2、サカズキ 1、竹筒 2、御幣（三島神社）

宗教者の関与：三島神社の宮司が設置場所でお祓い（川まつり

とは別行事の、豊前坊の祈祷をおこなった後、引き  
続き、川まつりの前でお祓いをおこなう。）

供物：鰯、白米（精米したもの）、塩（小皿一杯程度）、酒

実施団体：地区長、公民館長、育成会長などの役員で実施。毎年、参加人数は異なるが、10 名

前後の参加。男性はカザリの製作、女性は設置した後に食べる料理の準備をおこなう。

平成 29 年は、男性 10 名、女性 5 名程度の参加。



### 中島地区【地図番号⑨】

世帯数 71、人口 190 人、6 組

氏神：廣門神社

祭日：5 月初旬の連休中

場所：中島公民館で作成し、中島 4 号橋の堀に設置

カザリ：ワラツト 1、竹筒 大小 2 つずつ

供物：イリコ入りカンコロ（大根の酢の物）、酒（一合）

実施団体：全世帯でくじ引きをおこない 4 世帯選出。その 4 世

帶の中から男性 2 名、女性 2 名がその年の当番を務める。

男性はカザリの製作、女性は供物など料理の準備をおこない、午後 3 時頃になると地区内の住民が公民館に集まつくるので、オニギリとカンコロを配る。以前は川まつりを設置した場所で、飾りを見ながら談笑し、オニギリなどを食べていた。



### 横溝本村地区【地図番号⑩】

世帯数 69、人口 176 人、5 組

氏神：廣門神社

祭日：4 月第 3 週目の土曜日または日曜日

昭和 40 年代頃までは各家々で実施していた。

場所：当番者宅で作成し、公民館東側の堀に設置

カザリ：ワラツト 2、ヒヨウタン 1、サカズキ 1、竹筒 2

供物：一杯の白御飯（その日の朝に炊いたもの）、酒、

カンコロ（大根と昆布の酢の物）

実施団体：5 つの組内で順番に回し、当番になった組内が

実施する。男性はカザリの製作、女性は供物など料理の準備をおこなう。午後から地区内の住民が廣門神社に参りにくるのでカンコロと神酒を配る。平成 29 年は男性 10 名、女性 5 名程度の参加。



### 道本地区【地図番号⑪】

世帯数 121、人口 367 人、8組

氏神：月読神社

祭日：4月第4週目の日曜日

場所：道本コミュニティセンターで作成し、当センター  
西側の堀に設置

カザリ：ワラツト1、ヒヨウタン2、サカズキ2、竹筒2

供物：オニギリ1、イリコ、塩（ひとつまみ程度）、酒（一升）、水天宮のお札

実施団体：老人クラブが主となり、育成会と合同で実施。しめ縄の作成後継者を育てることと、  
子どもたちに昔ながらの作業などを教えていくことを重視している。小学生から高齢者までの  
男女が参加し、男性・子どもはカザリの製作、女性はオニギリ・チクワなど料理の準備をおこない、カザリを立てた後に公民館にて会食。平成29年は子ども20名、大人約30名が  
参加。お札は毎年、公民館長が久留米市の水天宮まで買いに行く。



### 前牟田東地区【地図番号⑫】

世帯数 268、人口 912 人、21組

氏神：志賀神社

祭日：5月第2日曜日に設置

（作成はその前の金曜日におこなう）

場所：作成者の自宅倉庫で作成し、公民館南側の堀に設置

カザリ：ワラツト2種類を2つずつ、サカズキ1、竹筒2

供物：オニギリ（ゴクサン）、キュウリ、鰹節（小分けに市販されているもの）、酒

実施団体：地区内の有志で平成27年に川まつりを復活させた。

昭和50～60年前までは何か所か立てていたが次第に衰退し消滅。飾りを作れる者もいない  
状態であったが、前牟田西区より作成手順を教わり、手順を紙媒体で記録として残している。



### 前牟田西地区【地図番号⑬】

世帯数 80、人口 230 人、7組

氏神：志賀神社

祭日：5月第2日曜日

場所：前牟田西区内の営農倉庫で作成し、

倉庫西側の堀に設置

カザリ：ワラツト 子どもが作成した数、竹筒2

供物：オニギリ、キュウリ、鰹節（小分けの市販されているもの）、酒（一升）

実施団体：老人会が作成を教え、育成会が作成。以前は各家または組内でおこなっていた川  
まつりも次第に衰退していき、16～17年前に老人会と育成会がおこなうという今の体制に  
変わっていった。お宮の行事とは別でご祈祷やお祓い等はおこなわないが、三島神社から御  
幣をもらい、竹の上部中央に飾りつける。



### 侍島地区【地図番号②⑥～⑩】

世帯数 137、総人口 373 人、8組（上区・下区の合算）

氏神：玉垂命神社

祭日：4月最後の日曜日

場所：当番の家で作成し、計5か所※位置図参照

（毎年決まった場所に設置）

カザリ：ワラツト2、ヒヨウタン2、二連サカズキ、竹筒2

宗教者の関与：三島神社でお祓い

供物：ゴクサン、イリコ、塩（小皿一杯程度）、酒、煮物（コンニャク、キュウリ、昆布、筍）

実施団体：組内単位でおこなっており、各所で飾りや供物も異なる。当番の家を「ヤド」と呼び、当番の家で作成から直会までを実施。昔の馬洗い場に設置している箇所が多い。



### 上木佐木下地区【地図番号⑪】

世帯数 78、人口 217 人、9組

氏神：三島神社

祭日：4月第1週目の日曜日

場所：上木佐木下区公民館で作成し、お宮前の堀に設置

カザリ：ワラツト2、ヒヨウタン1、三連サカズキ1

五連カツオブシ1、御幣（三島神社）

宗教者の関与：三島神社でお祓い

神事の際の供物はカザリに使用

供物：鰯、御飯（その日の朝に炊いたもの）、イリコ、塩（小皿一杯程度）、酒

実施団体：9組を4つの班に分け、順番に回す。各班で実施するため、人数が異なるが、多い

班で約60名、少ない班で約10名。男性はカザリの製作、女性は供物など料理の準備をおこなう。平成29年は4班が担当し、男性11名、女性5名程度の参加。



### 絵下古賀地区【地図番号⑬～⑭】

世帯数 203、人口 580 人、10組

氏神：高良玉垂命神社

祭日：4月 29 日

場所：11か所で実施し、それぞれの場所で作成・設置※位置図参照

カザリ：ワラツト2・ヒヨウタン1・サカズキ1・竹筒2

（大半は右の写真同様）

場所によってはバリエーションに富み、ナイロン製

の様々な色のい草を使って作成した苞もある。

供物：（東方）サキイカ・昆布・塩（小皿一杯程度）・イリコ・酒（一升）

（北の上、北の中合同）塩・イリコ・ゴクサン（円錐状に握ったもの）2つ

実施団体：10か所の組内単位で実施し、2つの組内が合同で実施している。合計で11か所

りを設置。参加人数は各組内によって異なるが約10名前後。男性はカザリの製作、女性は設置した後に食べる料理の準備をおこなう。



### 八町牟田下地区【地図番号④】

世帯数 158、人口 484 人、8 組

氏神：木本神社

祭日：4月第3週目の日曜日

場所：木本神社内にある八町牟田下区公民館で作成し、

当神社参道南側の堀に設置

カザリ：ワラツト2、三連カツオブシ（模擬）1、竹筒2

供物：オニギリ（ゴクサン）、イリコ、塩（ひとつまみ程度）、酒

実施団体：地区長、公民館長、老人クラブ代表、宮総代などが主となり実施する。毎年参加人

数が異なるが、男性はカザリの製作、女性は供物など料理の準備をおこなう。平成 29 年は  
男性 9 名、女性 10 名程度の参加。



### 個人：八町牟田上地区 野口宅【地図番号▲】

氏神：天満神社

祭日：4月下旬から5月上旬

カザリ：ワラツト2、竹筒2

供物：ゴクサン、イリコ、塩、酒

実施内容：八町牟田は上区と下区に分れるが、個人で作成しているのはこの家だけである。40 年ほど前は一軒一軒、個人で作成していたが、堀も次第に使用されず人々の日常から離れていったので衰退し、今ではほとんど川まつりをおこなわなくなったと語っていた。名称は「川まつりさん」河童の言い伝えが受け継がれ、食べ物を供えることで水難防止の祈願をおこなっている。稲藁ではなく、い草で飾りを作成して飾っている。作成から設置まで、一人でおこなっており、後継者はいない。



### 個人：蛭池 東森分地区 高井良宅【地図番号▲】

氏神：三島神社

祭日：4月第3日曜日

カザリ：ワラツト1

供物：ご飯（適当）、イリコ、塩（小皿一杯程度）、酒

実施内容：蛭池地区は小字単位で組を分け、計 12か所で川ま

つりをおこなっているが、個人宅の一画に1本竹にワラツトを1つだけ設置しているものがある。聞き取り調査の結果、林ノ内と同様に水難防止のために設置していることがわかった。個人宅に設置をしていた理由を尋ねると、子ども、孫、曾孫と同居しているのでその子たちが堀に入って溺れたり事故に巻き込まれないようにとの願いを込め、個別に設置を始めたということであった。子どもたちが家に帰ってきたら設置した川まつりに手を合わせ、御供えしたオニギリ、イリコ、塩、酒をそれぞれ食すことが決まりとなっている。

